

「中野好夫記念文庫」のいきさつ

外間 守善

比嘉春潮先生がなくなられ、信濃町の千日谷公堂での告別式（昭和五二年十一月）の折、「春潮さん、近頃、私は思想というものが信じられなくなってきました……」ということばを弔辞の中で述べられた中野好夫先生の淡々とした語り口と、そのことばの持つ意味の深さに、私は身ぶるいのするような感動を覚えたことであった。

戦後の日本のさまざまな思想状況の中にあって、革新陣営のすぐれた思想家であり、評論家としてきわだって活躍していた中野先生のことばであるだけに、わが耳を疑いたくなるようなことばだったのである。

比嘉春潮先生と思想とのかかわり方について述べようとなさった一言だったのであるが、私にはそれにもまして、中野先生御自身の、思想との激しいたたかいを振り返っての自省と、いろんな意味でかなり疲れておられた当時の先生の、穏やかな述懐であったような気がする。

思想を信じない思想家という、変な方のようなのだが、私は、思想そのものにこだわり続けて、

とどのつまり、「思想というものが信じられなくなった」と述懐する中野先生の告白と生きざまに、強烈な衝撃を受けたものだった。少なくとも、思想というものに迷い続けてきた私にとっては、千金の重みのある中野先生のことばだった。

「信じられなくなった」思想にこだわらなければならぬ日常をもつ中野先生の苦悩は、たいへんなものだっただろうと思う。

さて、私は、中野先生との個人的なつながりというよりは、中野先生と私のかかわりが発展して、法政大学沖縄文化研究所の「中野好夫記念文庫」に結びついていったいきさつを、後の世の人たちのため、記しておきたい。

昭和四七年の桜の花の吹き散る頃であったらうか、沖縄タイムス社の由井晶子記者から、中野先生の主宰なさる「沖縄資料センター」を閉じるにあたって文献資料のすべては東京に残したいという中野先生の御意向である。できれば、大学などの公的機関に寄贈したいということだが、法政大学はどうだろうか、という話もたらされた。

私は、ちょうどその数年前頃から、琉球大学にあった「琉球大学沖縄文化研究所」が、いつのまにか有名無実になりつつあることに慨嘆すると同時に、それにかわる沖縄研究のセンターを東京にも作りたいと考えるようになってきていた。おりふしにそのことを心ある人たちに話してもいた。法政大学では、昭和四二年から、日本で初めて大学および大学院の講座で「沖縄」をとりあげており、沖縄

研究に関する一つの足がかりが作られていたのである。そういう時期だったので、中野先生の意をうけた由井さんは、私に「沖縄資料センター」のことに持ちこんできたのではなかったらうか。

ただ、当時の私が心がけていたのは、純粹にアカデミズムの立場に立つ沖縄研究であり、人文科学の領域に根ざした研究センターを作りたいという念願であった。その意味では、思想的立場を明確にして沖縄にアプローチし、米軍の占領下にある沖縄の時事資料を収集していた「沖縄資料センター」の志や機能とは、少しばかりへだたりがあったのである。

そこで私は、時の総長であった中村哲先生をはじめ、法政大学の小田切秀雄、石母田正、小川徹先生らの御意見をうかがい、さらに、廣末保、益田勝美、西郷信綱先生ら、私の近くにいる文学部の先輩の方々にもそのことをお話した。資料を移管するにあたって、中野先生とゆかりの深い岩波書店の重だった二、三の方々とも話しあうなど（一時期、岩波書店に保管するという話もあったので）、時間をかけていろいろなご意見やご助言をいただくことにした。その結果は、ほぼ私の考えていた方向での研究所構想がのぞましいような印象だった。かんじんかなめの中村哲総長もそういう考え方だった。そのあと、中野先生に直接お目にかかり、研究所の構想を卒直に申しあげ、「沖縄資料センター」のかかわりについて先生のお考えをうかがうことにした。

その折、中野先生は私にこうおっしゃった。

「沖縄資料センター」は戦後十年、一定の役わりを果たしてきたと思う。ちょうど復帰も実現した

ことだし、ここいらで一つのくぎりをつけたい。「沖縄資料センター」の資料のすべては法政大学に無償で提供したい。大学の研究所が学術研究を軸にして運営されていくことは当然なことである。ただ、提供する資料は、一般の人たちにも広く開放して活用してほしい。できるものなら、資料の整理や活用のできる若い人が入るといいのだが……ということだった。

四千点余の資料を寄贈なさるにあたって、中野先生はなんらの付帯条件もおつけにならなかったのである。実にはすがすがしい申し入れであった。しかし、私は、沖縄のことを思いやる先生の話を感じ動的にかがいがいながら、心中深く期するものがあつた。それは、発足しばらくはやむを得ないとしても、研究所が発展的に運営されるようになったら、中野先生の志をなんらかの形でいかしていきたいということだった。

後日譚になるが、清廉な中野先生の御厚意に対して、大学側では、どのように報いるべきか、ずいぶん苦慮した。中野先生が謝礼なるものは固く断わるということだったので、結局、なにもしてさしあげることができなかった。さいごには、大学の総長である中村哲先生描くところの沖縄の「闘牛」の絵を謝礼という形でさしあげることにした。絵の話をおとどけた私に対して、中野先生はふだんと変わらぬ笑顔を向けながら、「中村君は沖縄の絵も書くのかね」とおっしゃった。中野先生らしいユーモアを感じながらも、私はその時、なんとなく先生の心のあたたかさが感じられてならなかった。しかし、絵をさしあげたことも、考えてみると、中村哲先生の個人的な好意だったわけであり、大学とは

関係のないことだったのである。中野先生のためにも、そして情理をつくされた中村哲先生のためにもいつの日にか、そのことを正確にお伝えしておかねばと思いつつ、私はついにその機会を失なうてしまったようである。

なにはともあれ、「沖縄資料センター」の全資料約四千点を法政にいただいたことがひきがねになって、法政大学に「沖縄文化研究所」を創設する動きがしだいに具体化していった。その意味においては、「沖縄資料センター」は「法政大学沖縄文化研究所」の母胎になったといっても過言ではないであろう。

ただし、それとても、当時の総長が、沖縄とかかわりの深い中村哲先生だったればこそその結果だったと思う。中村哲先生と沖文研の成り立ちについては、別稿でくわしく述べることにしたい。

「沖縄資料センター」が、米軍占領下における時事的な沖縄問題資料収集をし、広く公開して社会的に機能していたということは、それなりに意義深いことであつたし、センターの果たした役わりは沖縄戦後史の中で大きく評価されなければならないことである。ただ、「法政大学沖縄文化研究所」が学術研究を主目的にするという理念をもって設立されたために、かならずしも中野先生の高邁かつ進歩的な思想が、文献資料もろとも十全に受け継がれ、発展させられたというふうにはいかなかった面もあり、その点は、「沖縄資料センター」の資料のこれからの活用価値と、それを研究所がどのように向つていくかということにかかわっていく今後の課題になることであらう。

沖縄の古代を深く究めようとする姿勢は、沖縄の近代と思想的にかかわっていく接点を必然として持つわけであり、そのことのためにも、「法政大学沖縄文化研究所」に「沖縄資料センター」の全資料が格納されていることは有意義である。

現在、「沖縄資料センター」の全文献・資料約四千冊は、「中野好夫記念文庫」と改称され、法政大学沖縄文化研究所の資料室に格納されている。研究所創設以来の十三年間、学内はもちろん、学外の方々の利用頻度数の高い資料である。特に学外の方々が十三年経った今日でもかなり活用されていることは、中野先生の志にみあうことで、嬉しいことである。

研究所としては、設立当初の組織づくりが一段落した頃から、利用者の一層の便に供するため、この資料の整理と目録作成にとりかかった。「沖縄資料センター」の資料は「図書」とその他の「資料」に大別されるが、「資料」は文字通り戦後沖縄の政治的苦悩を物語るなまの資料であり、パンフレットや土地闘争のビラに至るまで周到に集められている。これらの整理には苦心を要し、研究所の比嘉実所員を中心に臨時職員の今井ちか子さんらを加え、二年がかりの整理作業のうえ、ようやく『沖縄資料センター目録』—中野好夫記念文庫—(B4判型・二段組・六〇〇頁)として昭和五七年に刊行にこぎつけることができた。資料をいただいてきた私にしてみれば、十年間の肩の荷をおろす思いであった。

この「目録」から、「沖縄資料センター」の資料の内容をいささか紹介してみよう。

『目録』では、移管されたすべての文献と資料を「図書」とそれ以外の「資料」に二分し、それ

ぞれの整理番号順に配列してある。「図書」は総数二百五冊である。

「資料」は、大きく八分類にしたが収録冊数は次のようである。

- | | | |
|-----|-------------|--------|
| (1) | 新聞 | 八一冊 |
| (2) | 新聞切抜帳 | 五九七冊 |
| | 年代別切抜帳 | 三四四冊 |
| | 主題別切抜帳 | 二五三冊 |
| (3) | 雑誌 | 一、一五四冊 |
| | 復帰関係 | 二〇冊 |
| | 基地関係 | 二〇冊 |
| | その他 | 一、一一四冊 |
| (4) | 雑誌切抜、パンフレット | 一、二四七冊 |
| | 復帰関係 | 一一〇冊 |
| | 基地関係 | 六一冊 |
| | その他 | 一、〇七六冊 |
| (5) | 年鑑、年報 | 八一冊 |
| (6) | 琉球政府刊行物 | 二五九冊 |

	行政府公報	一一二冊
	立法院議事録	一三〇冊
	裁判所所報	七冊
(7)	市町村刊行物	五三冊
(8)	英文資料	一四八冊

これらの資料は、今日になってみると一つ一つが生きたものとして貴重であるが、中でもきわだつて価値の高いのは新聞切抜帳であろう。新聞切抜帳は、年代別切抜帳、主題別切抜帳とともに全国紙にまたがっていて、特に復帰問題の日本全国的な盛りあがりのみられる資料として貴重である。戦後沖繩史における思潮のうねりが鳥瞰できることもこの切抜帳の大きな特徴といえよう。これには、各冊ごとに収録された記事の見出しをかかげ、検索のための便を図るようになっている。

新聞八十一冊の中には、沖繩現地にも国会図書館にもなかった初期の頃の「沖繩タイムス」紙があり、つい先ごろ国会図書館の力を借りてマイクロ化が図られ、「沖繩タイムス」紙の創刊以来の全容がととのえられたところである。米軍占領下の公式の記録である「行政府公報」「立法院議事録」も東京では他にみられない資料であるし、雑誌でも復帰関係、基地関係など今では得難いものが多いが、中でも米軍政のPR誌でもあった「今日の琉球」などは全誌揃っていて、現在、沖繩ですら入手できないものである。

これからあと、復帰運動や土地闘争の動向をテーマとして研究するには、「中野好夫記念文庫」は、天下唯一の資料を備えた宝庫といふべきであろう。

(昭和六十年十二月十二日記)